

2023年9月24日

年間第25主日

菊地功大司教 メッセージ

マタイの福音に記されたぶどう園で働く労働者と主人の話は、なんとなく心が落ち着かない話であります。確かに記されている話では、主人は最初の労働者に一日につき一デナリオンの支払いを約束して雇用したのですから、何も約束違反はしていません。しかし実際には、明らかに自分より短い時間しか働いていない労働者が、自分より先に一デナリオンもらっているのだから、もっと働いた自分にはより多くの報いがあるはずだと考えるのは、支払いが労働の対価であるという考え方からは、当然です。実際問題、雇用の現場で、同じ職種にもかかわらず、丸一日働く人と1時間しか働かない人を、全く同じ給与にしたとら、あっという間に労働争議が発生しそうです。

しかしイエスの本意は、労働の対価としての支払いのことにないことは、その終わりの方の言葉によって少し理解できるような気がします。

「わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ」

すなわち、イエスはここで、ご自分のいつくしみについて語っておられます。ご自分が愛を持って創造し、賜物として与えられたいのちを、神がどれほど大切にしておられるか。そのいのちに対する愛は、分け隔てなく、価値における優劣の差もなく、すべからく大切であり、愛を注ぐ対象であり、いつくしみのうちに包み込む対象であることを、この言葉は明確にしています。

この世界は、往々にして、数字で見える成果によって人間を評価し格付けします。それが極端になると、人間のいのちの価値を、能力の優劣によって決定し、この世界に役に立たないいのちには存在する意味がないという暴力的な排除の論理にまで到達してしまいます。数年前に発生した、障害者の方々の施設を元職員が襲撃し、19名の入所者を殺害するという事件を思い起こします。犯人の、「重度の障害者は生きていても仕方がない。そのために金を投じるのは無駄だ」などという主張が、極端に走ったいのちへの価値判

断を象徴しています。神にとっては、どのような違いがあつたとしても、ご自分が創造されたいのちは、すべからく等しく大切な存在であることを、今日の福音は明確にしています。

本日は、世界難民移住移動者の日であります。教皇様は「移住かとどまるかを選択する自由」をテーマとして掲げられました。メッセージの中で教皇様は、ヨハネ・パウロ二世のこの言葉を引用しています。

「移民と難民のために平和的状况を築くには、まず、移民しない権利、すなわち母国に平和と威厳をもって住む権利の保護に真剣に取り組まなくてはなりません」

その上で教皇様は、「移民難民は、貧困、恐怖、絶望から逃れるのです。こうした原因を根絶し、やむにやまれぬ移住に終止符を打つには、わたしたち全員が、おのおのの責任に応じて、それぞれが協力して行う取り組みが求められます」と呼びかけておられます。

すべてのいのちは、優劣の差なく、すべてが神の目にとって大切な存在です。その愛といつくしみは、すべてのいのちに向けられています。神の愛といつくしみのまなざしを、わたしたちの利己心が、差別意識が、排除の心が、遮ることのないようにいたしましょう。